

仏教最大の聖地ブッダガヤの世界遺産と地域社会 －問われる「世界遺産」の行方

World Heritage and Local Community: Vectors in the Construction of
World Heritage in BodhGaya

前島 訓子

Noriko Maejima

仏教最大の聖地ブッダガヤの世界遺産と地域社会 －問われる「世界遺産」の行方

前島訓子

相山女学園大学他 非常勤講師

noriko_3sty@yahoo.co.jp

Abstract

How does given historical relics come to be reestablished as “World Heritage”? What does the actual transformation of the given local historical sites to be registered as “World Heritage” mean to local society? Under these general concerns, this essay traces the local context of the registration of Mahabodhi Temple in Bodhgaya as World Heritage to shed a light on the local dynamics of the establishment of World Heritage that would point to the areas of conflict and negotiation or resolution thereof among stakeholders in the process.

Key Words: world heritage, living monument, development plan, local people, the collective memory

1. はじめに

UNESCOが1972年に世界遺産条約を採択し、遺産登録を進めてからすでに45年の歳月が経つ。登録された遺産の数は、2017年現在、自然遺産・文化遺産等を含め1073件に上る（UNESCO）。日本でも1992年に条約を締結すると、世界遺産に対する関心が高まりをみせ、今では遺産への登録が自治体や国を上げた盛り上がりを見せている。

しかし、当該社会の一部を構成する遺跡等が「世界遺産」となるということはどういうことなのだろうか。任意の遺跡等が「世界遺産」になる背景には、当の遺跡に時と場所を超えた普遍的な価値を見出し、その価値を特定の地域や人々に限らず人類の資源とするだけの膨大な（理念的かつ物理的な）力が働くに違いない。だが、その力が実際にどのように働き、どういった結果につながるかという観点からすれば、遺跡等が「世界遺産」となるプロセスは決して一概にこうだとは言えない。アジア地域に点在する仏教遺跡を例に挙げると、ミャンマー

のパガン遺跡のように歴史的遺跡とみなされながらも遺産登録に至っていない地域もあれば、インドネシアのボロブドゥール遺跡のように、遺産に登録され遺跡周囲の公園化が進む地域もある。そして、本稿の事例が示すように、遺跡周囲の公園化に抗いそれを阻止しようとする力に阻まれ軌道修正を迫られる地域もある。

こうした遺跡の「世界遺産化」の過程で立ち上がる問題は、いわゆる「世界遺産」という事柄が揺るぎない確かなものなのか、それとも遺跡の在り方や価値を誰がいかにか決定していくかをめぐって、どのように争われ、形作られつつあるのかということである。では、今日を生きるわれわれにとって「世界遺産」がどのような（理念的・実践的）意味を有するのか。この根本的な問いに接近するうえで、各々の遺跡が「世界遺産」となるローカルな文脈を追っていくことは欠かせない作業となる。

世界遺産が世界的ブームとなる中、これまでも「世界遺産」や「文化遺産」等を取り上げた研究が分野や領域を超えて進められてきてい

る（石澤、1995、山下、2007、秋道、2007、鈴木、2015、野口・安倍2015など）。今や、遺産登録が地域社会の活性化の起爆剤として、あるいは地域戦略の一つとして、国家的、地域的期待や思惑を孕んだものになっている。その中で、当該社会の一要素に過ぎなかった遺産の普遍的価値への引き上げによって、直接的、間接的に当該社会に及ぼす肯定的、否定的な地域への影響もまた指摘されている（秋道、2007、石澤、1995）。

特に、遺産の保存保護と開発という観点からみれば、社会学の中では、日本における歴史的町並み等の歴史的環境の保存と経済的開発をめぐる市民と行政の緊張等に注目した研究が積み重ねられてきた（例えば、片桐、2002、堀川、1998）。例えば、堀川が、小樽運河を事例に、歴史的町並みや景観等が「保存」されるべきだとする価値観が最初か備わっていたわけではなく、むしろ開発等の危機にさらされ、その是非が問われ、そして保存やそのあり方に光が当てられていく過程は、「世界遺産」という主題においても多くの示唆を与えてくれるだろう。

しかし、世界遺産がその登録前後において、当該社会において問われ、問い直される過程は、単に「保存か」「開発か」といった争点にのみに還元することはできないし、その争点に関わる主体もまた「行政」対「市民」の対立の構図に単純に落とし込めるものではない。例えば、国際的な観光地であり、かつ聖地として位置づけられる地域での遺跡の世界遺産登録の場合、既存の緊張に加え、様々な地域的緊張が多様な形で現れることにもなっているからだ（前島 2010、2012、2013）。

したがって、まさに、問われるべきは、20世紀後半に誕生した世界遺産が、遺跡への価値や意味付与にとどまるものではなく、遺跡やその周囲をめぐる新たな争点を生み出し、様々な諸主体の登場を促し、結びつけ、時に対立しながら「世界遺産化」していく過程、言い換えれば、「場所の創造」といった点に求められる。

以上の観点から、本稿は、仏教創始者であるブッダ（釈迦）の悟りの地であり、2002年に遺跡が世界遺産に登録を受けたインド・ブッダガ

ヤの事例を取り上げていきたい。当該地域は、国内外の仏教巡礼者が絶えず訪れ、祈りを捧げる「生きた遺跡」を中心に、その周辺にヒンドゥー教徒やイスラーム教徒の人々の生活空間が作り上げられてきた。ところが、遺跡の遺産登録を機に公になった遺跡周囲の開発計画が地元社会に波紋を呼ぶことになった。そこで、本稿では、世界遺産登録を機に顕在化した遺跡周囲の開発をめぐる緊張を手掛かりに、当該地域において遺跡の世界遺産となるプロセスが社会的にどのような意味を持つのか、そして「世界遺産と共に生きる」ということがどういうことなのかを生活者の視点から紐解いていきたいと思う。なお、本稿では、事実を述べる場合にはそのまま世界遺産と表記し、争点の、あるいは問われる対象として論じる際には「世界遺産」と表記する。

2. 仏教最大の聖地の「世界遺産」

2.1 ブッダガヤが誇る仏教遺跡

ブッダ悟りの地であるブッダガヤ（インド・ビハール州）は、誕生の地ルンビニー（ネパール）や初転法輪の地サルナート、涅槃の地クシナガラに並ぶ、仏教四大聖地の一つである。この四大聖地に限らないが、ブッダと関わりのある地はインド北部地域（ビハール州やウッタラプラデーシュ州）を流れるガンジス河流域に点在し、いずれもその痕跡を示す建造物跡が発見されており、仏教巡礼の拠点となっている。

中でもブッダガヤは人口38,439人（Census2011）の小さなまちであるが、2011年以降、1日平均約10万人を超える国内外の巡礼者や観光客が訪れるまでになっている¹。彼ら、彼女らが目指す先にあるのが、ブッダ成道の地であることを象徴する50mの高さを超える大塔（大菩提寺）や金剛宝座、そして菩提樹である（図1・2参照）。

大塔はアショーカ王が紀元前3世紀に建立したものを起源に、現在のものは5～6世紀頃の建造物だとされている。建物の入口入って奥の

¹ 2013年の巡礼者・観光客は、ブッダガヤにおいて爆破事件が生じたことから減少するが、2014年には約15万人に達している。



図1 悟りの地を記念し建立された大塔



図2 菩提樹とその周囲を行き交う巡礼者

部屋に高さ2mのブッダ像が安置されている。大塔と同じくアショーカ王建立の金剛宝座は現大塔よりも古い年代のものとされる。ブッダが坐した地点ともいわれる金剛宝座は、大塔とその西側に枝葉を広げる菩提樹との間にちょうど位置している。かつては巡礼者等が触れることも可能であったその場所は欄干で囲われ、直接触れることはできなくなっている。これらの遺跡群を取り囲むように整備された歩道は、巡礼者や観光客の便宜を図り乳白色の大理石が敷設され、遺跡の四方八方に礼拝や瞑想する僧侶や信者が集っている。

2.2 世界遺産となる仏教遺跡

こうした仏教遺跡は、ブッダとの関りを裏付け、歴史を物語るものとしてだけでなく、「仏教聖地」の形成過程を紐解く上でも重要である。というのも、いわゆる「仏教聖地」は、13世紀頃に仏教が影響力を失い、インドが仏教空白の時代を迎える中で、建造物の破壊や崩落が進み、忘れられていた状態にあったからである。

一度は忘れられていた地が再び光が当てられるのは19世紀になってからのことである。英領統治下にあったその当時、広範囲にわたって歴史的遺跡の調査が英領インド考古学調査局によって実施された。そして遺跡の発掘が進められ、仏舍利やアショーカ王柱の発見等、ブッダとの関りを裏付ける考古学的発見により、忘れられていた地が「仏教の地」として特定されていくのである。例に漏れずブッダガヤにおける遺跡もこうした過程で注目されることとなった。大塔は大きな崩落を免れていたものの、痛みが激しい状態にあったが、4年に亘る歳月をかけて大規模な修復を受け、現在の佇まいとなっている。

しかし、なぜ多くの仏教遺跡がイスラームによる破壊や長年の風雨による劣化で崩落する中で、ブッダガヤの遺跡がその姿を保ちえていたのか。一説によれば、仏教に危機が差し迫る中で、当時の仏教僧の手によって、寺院の人為的破壊を回避するために地中に埋められたからではないかともいわれている。多くの仏教関連の地が建造物の形を完全に残していないにもかかわらず、今日、遺跡が寺院として機能しているブッダガヤの遺跡群は極めて特徴的だといえるだろう。

いずれにせよ、ブッダガヤをはじめとするインドの「仏教聖地」は、遺跡の発見によって誕生してきたといえよう。特に、ブッダガヤの遺跡は修復・修繕をその後も繰り返し、その一方で国内外の巡礼者が絶えず参拝に訪れ、儀礼を執り行う等、信仰の息づいた「生きた遺跡」として復活を遂げることになる。遺跡から半径1～2kmの範囲では、信仰の篤い世界各国地域の仏教信者等によって、1956年以降から各々の仏教宗派の寺院建設が進められてきた。その数、

現在50ヶ寺を超える。

こうした著しい変化を経験するなか、2002年に開催されたブタペストでのユネスコ会議において、ブッダガヤの遺跡は“ブッダガヤ・マハボディ寺院群”として世界遺産に登録を受けることとなった。遺跡は、同時代に建てられた初期のレンガ建築の建造物のなかでも、インド亜大陸に残る仏教建造物の一つとして高く評価された。つまり、ブッダガヤの「生きた遺跡」は、国際的評価を受けることで、新たに人類の普遍的な遺産として、守られ、後世に継承されるべきものとして位置づけられることになった。

それでは、世界遺産としての登録が遺産をとりまく当該地域社会にどういった影響を及ぼすことになったのだろうか。

3. 世界遺産登録と地域社会

3.1 遺跡を取り巻く地域社会

まず遺跡を取り巻く地域社会について触れておきたい。インドにおける仏教遺跡の多くが上述したように仏教衰退とともに荒廃し、仏教徒だけでなく、地元の地域社会との接点をも失っている状況にあった²が、実はブッダガヤの遺跡には異なる点があった。

ブッダガヤの遺跡は1953年にブッダガヤ寺院管理委員会（BTMC）による管理体制が成立するまで、ヒンドゥー教シヴァ派の僧院の院長であるマハントが所有し、管理下においていた。その上、遺跡付近はブッダガヤと他地域とを結ぶ道が交差しており、人々の居住地はもちろん、経済活動の場が広がるなど、地元の人々の生活の中心地となっており、特に遺跡周囲に生活していた人々は、経済活動をマハント³に依存し、社会的、経済的にも非常に強い影響を受けていた⁴（前島、2007、91－94）。

² 誕生の地ルンビニーは19世紀末まで特定されてすらおらず、涅槃の地クシナガラも発見されるまでジャングルの中にあった。また、ブッダが度々訪れているヴァイシャリーの遺跡一帯が地中に埋まっていた状況にあった。

³ 16世紀に初代マハントがこの地に僧院を構えて以降、巨大地主としてビハール州において名を馳せるまでの力を持つようになっていた。

⁴ ブッダガヤの人々はマハントの土地や僧院で働くことを強いられ、就労の自由はなかった。

この頃住民と遺跡との関係を紐解くと、遺跡周囲の空間が人々の生活空間と切り離されたものではなかったことが分かる。2005年に実施した調査によれば、かつては地元の人々の住居が、現在では立ち入りが制限されているエリアにも建てられており、誰もが自由に行き来できるものであったというし、地元の人々の中には、夏の暑い日には涼をとるため遺跡の近くに来て寝ることもあったという⁵。また、遺跡近くの池（蓮池）は、泳いだり、洗濯をしたり⁶、ヒンドゥー教の儀礼を執り行う場として利用していたという⁷。ようするに、この地に住む人々にとって、遺跡は日常生活と切り離されたものではなく、むしろ日常生活の一部としていわば埋め込まれていたということだ。

しかし、独立以降、遺跡の所有・管理のあり方が大きく変わり、次第にマハントの地元に及ぼす影響力も弱まっていき、遺跡が国際的な関心を集めるようになっていくと、遺跡と住民との関係も変化しはじめた。遺跡に近接した住居の撤去が押し進められ、遺跡と人々の生活空間が切り離されていくのである。移動を強いられた人々は、立ち退きによる保障をめぐる問題を抱えながら、新たな地で生活再建を余儀なくされた。だが、彼らの中には、新たな変化に目をつけ、土産物屋や観光ガイド、宿泊業等、観光関連業を担うことで、マハントに依存した生活を一転させ、ブッダガヤの観光業の発展の一役を担うようになっていった（前島、2011、74－75）。こうしたブッダガヤの生活者は、世界遺産登録をどのように受け止めたのだろうか。

3.2 「世界遺産」に対する地域の反応

遺跡の世界遺産登録は、ブッダガヤの名を世界中に広め、さらなる巡礼者や観光客の誘引につながることが期待されるなど、地元でも喚起に沸く出来事であった。特に仏教徒からみれば、世界遺産への登録は喜ばしい出来事であると同

⁵ M.Singh氏、男性、45歳、インタビュー [2005年8月11日]

⁶ C.Singh氏、男性、31歳、インタビュー [2005年8月4日]

⁷ I.Saw氏、男性、70代、インタビュー [2004年9月9日]

時に、一方で当然のことと考えられていた⁸。

一方、ブッダガヤに住む大半のヒンドゥー教徒やイスラーム教徒の住民は、観光客の増加に伴う地域経済への期待と、ブッダガヤの名が世界に広まるという誇りから歓迎する者もいたが、喜びの声ばかりあげているわけではなかった。遺跡周囲の開発計画が明るみになることで、次第に世界遺産登録に対し疑問の声を挙げる住民が現れたのである。

しかし、そもそも遺跡周囲の開発は決して新しい出来事ではない。独立以降、度々開発計画が策定され、実施されてきた。その中で、インド政府は遺跡周囲に生活の基盤を築いてきた人々の集落を立ち退かせ、遺跡から生活空間を切り離し、公園化を進めようとしてきたのである。住民に大きな犠牲を強いた開発圧力に対し、中には抵抗する者もいたようであるが、開発を押しつけるだけの力を当時の住民はまだ持ち合わせてはいなかった。

では、なぜ、世界遺産登録後の開発計画は、住民の間で問題として取り上げることができたのであろうか。この点については次章で触れることにしたい。ここで指摘しておきたいのは、世界遺産の登録による開発計画案の公開を受けて、地元ならではの場所の問い直しが進んだという点である。以下では、その点を確認していく。

3.3 世界遺産登録が露呈させた問題とは？

世界遺産登録を受けた遺跡は人類共通の財産として保護・保全を行うために、遺産を中心にバッファゾーンを設定し、利用・開発規制を敷くことが求められる。ブッダガヤの場合、政府は次の保護措置を開発計画案の中に組み込んでいた。遺跡を中心とする周囲の景観に配慮し、コアゾーンとバッファゾーンを設定し、それぞれの区域において開発規制を定めるものである（Department of Tourism Ministry

of Tourism & Culture Government of India, 2002）。具体的に言えば、遺跡から500mの範囲をコアゾーンとし、いかなる開発も、建物の建設も禁じ、緑地地帯とすることを定めた。そして、バッファゾーンはコアゾーンの境界から2 kmの範囲であり、そのうち1 kmの範囲は、仏教寺院の建設を除き、開発が制限されるエリアであり、住居や商業施設等の建物の新規建設は禁じられる。さらに、その周辺1 kmの範囲は、ホテルや居住地の建設が許可されるエリアとなるが、高さ制限が設けられている。こうした、UNESCOの理念とも重なる開発計画は、計画対象エリアに生活し、経済活動を行う地元の人々⁹の不安をかきたて、反対運動が組織されることにもなった（前島、2010、174）。

また、住民の中には、同エリア内において仏教寺院の建設が許可されている点や、開発計画を示した地図にヒンドゥー教やイスラーム教の宗教施設の記載がない点等を問題視する者もあり、世界遺産が仏教を擁護するもので、他の宗教を排除するものだとして非難した（同上、175）。つまり、開発計画が住民にとって遺跡およびその周囲から自分たちの生活の場を切り離し、築いてきた生活手段を奪い、排除するだけにとどまらず、他宗教を軽視することにはほかないからだ。

こうした問題がくすぶる最中に、政府は公的施設（ブロックオフィスや公立高校等）の移転¹⁰を取り決め、古い施設の取り壊しを実施した。住民はこうした動きを目の当たりにして、住民を無視した開発が着々と進行しつつあることに危機感を募らせ、運動を組織するリーダーは当局に抗議し、他の住民を巻き込んだ反対運動を進めていた。他にも、住民の抗議は、政府が現在の商業施設の移転を念頭に、移転先に新

⁸ チベット寺院（カルマ・パ、ゲルグ・パ）、ブッダガヤ寺院管理委員会、バングラデシュ寺、マハボディ・ソサエティ、印度山日本寺、インターナショナル・メディテーション・センター、プータン寺に駐在する仏教僧へのインタビュー [2004年9月5～25日]

⁹ バッファゾーンのエリア内には、居住地だけでなく、土産物屋や日常生活に関わる商売など経済活動を行う場が広がっていることもあり、特に商売を行っている住民や一度立ち退きを経験している住民は計画を深刻なものとして受け止めていた。

¹⁰ 2004年1月6日、公立高校の校舎移転が進められることに反対するため、地元有力者や学生の親や自治体の議員等、住民が集まり第1回目の抗議集会を開いていた。そして2005年9月の調査の時点ではブロックオフィスの移転の話が進んでいる状況であった。

たな施設を建設し、すでに工事が完了しているにもかかわらず、住民の誰一人としてその施設を利用しようとしなという態度にも現れている。

だが、一部の仏教徒にとってこの開発は歓迎して受け入れられていた。例えば、遺跡の仏教徒への返還を求め、1992年から大塔返還運動を主導している佐々井秀嶺¹¹は、人々の住居を取り除き、新たなブッダガヤを建設しようとする計画を歓迎し、「清浄な大公園」となることを強く求めている。勿論、こうした仏教徒の声は以前からあった。遺跡に地元の人々の生活空間が隣接し、遺跡周囲に土産物屋が立ち並び神聖な空間を汚し、さらに客引きが巡礼を妨げているとみなしていたからである（Rastrapal 1992、11）。それゆえ、世界遺産登録に伴う開発計画は、まさにこうした問題を一掃し、聖域を守ることにほかならないのだ。

したがって、世界遺産は遺跡周囲の開発問題を通して、仏教以外の宗教を排除すべきではないことを主張するヒンドゥー教徒やイスラーム教徒の生活者の立場と、神聖な地から世俗的要素を取り除くことを求める一部の仏教徒の立場との違いを露呈させることにもなっている。

4. ブッダガヤに生きる人々のまなざす「世界遺産」

4.1 問い直される「世界遺産」

確かに、開発計画に対する地域の反応は、いずれも生活者を蔑ろにすることを懸念する人々の抵抗だといえる。だが注目したいのは、人々の声が生活者ならでは場所の在り方や遺跡との関りを問い直すものとなっていたということだ。

反対の声を挙げる者の中には、従来の開発において立ち退きを強いられた経験を直接的、間接的に受け、その記憶を共有している者も少なくなかった。また、そもそもブッダが悟りを開

くことができたことや、遺跡が今日まで守られてきたのは、自分たちの祖先が代々この地に住み続け、遺跡と関わってきたからに他ならないと答える者もいた（前島、2010、177-178）。つまり、世界遺産の登録という新たな価値が遺跡に付与されたことをきっかけに、彼らは、生活者としての集合的記憶（経済的貧しさや立ち退きの経験、祖先とのつながり、宗教の違いを越えた寛容性）やそれに基づいた歴史解釈をもとに場所の意味を問い直し、異議申し立てを行っていたのである。

さらに、住民の中には、進められようとしている開発計画が目指す場所の在り方（居住地を取り除いた公園化）は巡礼者や観光客を強盗や殺人、レイプなどの危険に晒しかねないと述べている。むしろ、住民が遺跡の近くで生活しているからこそ、監視が行き届き、巡礼者や観光客が安心して参詣ができるというのである（同上）。

ようするに、彼らにとってみれば、住民を排除する開発を伴った世界遺産は、結局は、巡礼者や観光客を危険に晒すものでしかない、というのだ。もっと言えば、世界遺産が重視する遺産を「守る」ということは、住民を犠牲にしなければ成しえないものなのか、という住民の問いかけだといえよう。

4.2 なぜ「世界遺産」の問い直しが進んだのか？

それにしても、なぜ初期の開発圧力にはなすずけもなかった彼らが声を挙げることができたのか。その理由はもちろん多岐にわたるであろう。だが指摘できるのは、そもそも初期の頃は、人々がマハント支配の影響をまだ強く受けていたと考えられ、声を挙げるということは容易なことではなかったということだ。ところが、インドの近代化さらにはグローバル化とともにマハント支配体制が崩れ、地域社会が変容する中で、マハント支配に縛りつけられていた人々が経済的、社会的、政治的自立を図るようになっていく。この点が、彼らの主体的な行動に向かうための素地を作ることになっていたことは間違いのない。例えば、反対運動を担ってきた住民

¹¹ 彼は1967年にインドに渡り、1988年にインドに帰化している。そして、1956年にアンベードカルの下で仏教に改宗した元不可触民の人々を、アンベードカル死後、長年にわたり先導し、ブッダガヤの遺跡の仏教徒への返還を求める運動に携わっている。

は、マハント支配の揺らぎとともに、いち早く観光業に着手した人々が中心を担っていたことからもうかがえる（前島、2011、75）。つまり、自由な就労機会と収入獲得手段の多様化に伴い、経済的成功を手にした人々が中心となり、遺跡の周囲のあり方を問い直していたのである。

したがって、彼らが自らの場所を問い直す過程は、支配から脱した人々が利害や思惑の相違によって集団化し、主体化していく過程でもあるといえよう。

5. おわりに－「世界遺産と共に生きる」とは？

以上のことから、本事例を通して、世界遺産となるプロセスの社会的意味や「世界遺産と共に生きる」ということはどういうことなのかについて最後にまとめておきたい。

ブッダガヤの遺跡は、単なる考古学的価値ある遺跡なのではなく、信仰が息づいている宗教的な遺跡でもある。そのため、世界遺産となった遺跡の保存・保護をめぐることは、人類に継承すべき普遍的価値を守りつつ、生きている遺跡であることとのバランスをいかに保ちながら、文化的景観に配慮した開発をいかに実施するかが課題となっている。

まず確認しておきたい点は、「世界遺産」をめぐる UNESCO の理念や、その理念と重ねつつ政府主導で進められる「上からの開発」は、地元の人々の考える遺跡やその周辺の在り方とかならずしも一致しない、むしろ多くの場合、ブッダガヤの遺跡のみならずブッダガヤそのものの在り方を決める本質的かつ決定的な局面において相容れないといわねばならない。現に、住民は「世界遺産」の在り方、すなわち、それ固有の「場所性」を求めらる中で、外部から押し付けられる「世界遺産」の方向性に疑問を投げかけ、抗議し、抵抗しつつ、住民ならではの「世界遺産」の在り方を示してきた。住民にとっての「世界遺産」とは、地元の人々や彼らの生活から切り離してあるものではない。そして、こうした主張の根拠になっているのが、この地に生きる彼らの集合的記憶であった。もちろん、

彼らの記憶ははじめてから自覚されていたわけではない。それは、世界遺産登録を機に遺跡と自分たちのつながりを喚起し、集合的記憶として共有し、この地に生きる人々の「世界遺産」のあるべき姿を問う際の資源として形作られ現れる。

そして、圧倒的大多数の生活者がヒンドゥー教徒やイスラーム教徒であるブッダガヤの場合、単純に仏教遺跡の保存保護の問題だけを考えればいいということではなく、ブッダガヤにおける多宗教的事情を考慮する必要がある。上述したように、住民の中には、世界遺産に伴う開発が、仏教徒を擁護し、他宗教を蔑ろにするものだとか批判する者がいた。他にも、仏教遺跡と同じく古いヒンドゥー教の寺院が無視されていることに声を上げる者や、イスラーム教の中には、開発によって閉鎖の危機に直面したモスクに続く「道」が、先祖の代から継承してきたもので、遺跡と同じく古く守られてしかるべきはないかという声を上げる者もいる。遺跡をどのように保護し保存するか、遺跡の周辺をどのような場所、空間にしていくかという問題は決して単純ではない。結局のところ、「生きた遺跡」の場合、誰の、どういった歴史を保存・保護し、他の宗教とその信仰をどうするかという問題になるわけである。

その上で、遺跡の保存保護をめぐる住民をその過程にいかに巻き込んでいくかということが、世界遺産と共に生きる上で考えられなければならない点だとするならば、彼らの遺跡に対する見方（言い分）がどこまで許容できるのかが、関係者や関係諸機関に問われている問題なのではないだろうか。すでに住民の抗議の声は、計画の一部の中断や修正を迫るだけの一定の影響をもっていた。例えば、遺跡横を通るモスクに通ずる道を閉鎖する計画が、イスラーム教徒やヒンドゥー教徒による抗議の末、中止に至っている。

こうしたことから分かるように、遺跡が「世界遺産」となるプロセスは、遺跡が国際的な基準を満たし、評価され、遺産リストに登録されるという一連の手続き上のプロセスに収まるものではない。むしろ、このプロセスは、住民が

「世界遺産」に向き合っていく過程であり、主体的に関わっていく過程でもある。もっと言えば、この地に生きる人々が、遺跡をめぐる異なる思惑や利害を持った諸主体と関わり、時に対立し、時に協力し、妥協しあいながら、その都度「世界遺産」が形作られていく過程だといえよう。

さらに、世界遺産への登録は、地元経済に大きな影響を与えることは知られている。だが問題は、地元の人々の行き過ぎた経済活動等が、しばしば本来の目的である遺跡の保存・保護を脅かしかねない状況につながるということである。いくらブッダガヤが聖地であるとはいえ、地元への経済効果を完全に否定することはできない。むしろ、そうした効果を促進させつつ、懸念される問題をいかに避けるかという課題も残されているだろう。だが、本稿が述べたいのは、地元民は経済効果を追求するだけの存在ではないということだ。彼らの視点に立てば、「世界遺産と共に生きる」とは、「世界遺産」に伴い直面する問題に時に声を挙げ抗議し、時に妥協しながら、また時には主張を断念しながらも、自分たちの経済的、生活的基盤の維持、発展を求めると同時に、異宗教を否定せず、多宗教の共存を図っているということだ。こうした、「世界遺産」をきっかけに地域住民が、生活者としての経験や記憶に向き合い、上からの「世界遺産」に対し、その在り方を問うなど、主体的に関わろうとする、まさに彼ら彼女らの「営み」こそが「世界遺産と共に生きる」ことそのものなのではないだろうか。

参考文献

- 秋道智彌編 2007『水と世界遺産 景観・環境・暮らしをめぐって』小学館
- 石澤良昭編 1995『講座文明と環境 第12巻 文化遺産の保存と環境』朝倉書店
- 片桐新自編 2002『歴史的環境の社会学』新曜社
- 鈴木正崇 2015『アジアの文化遺産 過去・現在・未来』慶應義塾大学東アジア研究所

野口敦・安倍雅史編著 2015『イスラームと文化財』新泉社

堀川三郎 1998「歴史的環境保存と地域再生－町並み保存における『場所性』の争点化」『講座12 環境』東京大学出版会

前島訓子 2007「『仏教聖地』における伝統支配の衰退と社会変容－独立以降のインド村落社会研究を手掛かりに」『名古屋大学社会学論集』第28号、83-104

前島訓子 2010「ローカルな文脈における『聖地』の場所性－インド・ブッダガヤにおける『仏教聖地』を事例に－」『日本都市社会学会年報』第28号、167-181

前島訓子 2011「インド『仏教聖地』構築の舞台－『仏教聖地』構築と交錯する地域社会」第23号、67-81

前島訓子 2012「インドにおける『仏教聖地』－生きた文化遺産の葛藤とその行方」、『季刊 民族学』11-19

前島訓子 2013「交錯する『仏教聖地』構築と多宗教的現実－インド・ブッダガヤの『仏教聖地』という場所の形成」『日本都市社会学会年報』第31号、111-128

山下晋司編 2007『資源人類学02 資源化する文化』弘文堂

Department of Tourism Ministry of Tourism & Culture Government of India 2002. *Application for the inscription of the Mahabodhi Temple Complex as a World Heritage Site*, 1-15

Rastrapal Mahathera 1992. *The Glory of Buddhagaya Mahabodhi Temple*

Statistics of domestic and foreign tourist visit to the state of Bihar year 2001-2014

『バンテジー、ジュネーブ、パリへ行く－バダント・アーリヤ・ナーガルジュナ・秀嶺佐々井ジーの国連、ユネスコへの旅』(<http://kobe.cool.ne.jp/nagaland/gotounesco.htm>)

Census 2011 (<http://www.census2011.co.in/data/>)

town/801406-bodh-gaya-bihar.html)

UNESCO (<http://whc.unesco.org/en/list/>)